

アウトドアスポーツから見る 徳島の魅力と優位性

研究員 佐々木志保

要 旨

1. 2019年からの3年間に世界的なスポーツイベントが日本国内で続けて開催される予定であり、スポーツ業界にとってまたとない好機が訪れようとしている。徳島県を見てみると、2017年にラフティング、2018年にはウェイクボードの世界大会開催地となった。徳島県の豊かな自然環境は、アウトドアスポーツで強みとなり、体験型観光のコンテンツの一つとして可能性を秘めている。
2. 本稿では、アウトドアスポーツを「自然環境の中での身体活動を伴う運動(競技かは問わず、体験アクティビティを含む)。“する”ことを目的とし、人の力を原動力とするもの」と定義したうえで、徳島県の現状や取り組みについて整理・考察し、今後の可能性について言及した。
3. 国内外を問わず、アウトドアスポーツ体験の潜在的な需要は大きい。予約サイトや旅行情報誌などを活用し、情報の充実を図る必要がある。一人でも多くの人に徳島県で体験可能なアウトドアスポーツを認識してもらうことが、将来の来県者数増加や体験者数増加、ひいては魅力度向上につながっていくと考える。
4. 徳島県では、県西部(美馬市、三好市、つるぎ町、東みよし町)や県南部(阿南市、那賀町、美波町、牟岐町、海陽町)には全国有数のアウトドアスポットがあり、交流人口の増加や地域活性化を目指してアウトドアスポーツを活用しようとするまとまった動きが見られる。また、県全域では「自転車王国とくしま」の一連の取り組みや、自治体・事業者ごとに推進するなど、様々な動きが見られる。
5. アウトドアスポーツの推進によって、好影響が及ぶ周辺産業は多く、また裾野も広い。徳島県は、海・山・川・空のフィールド全てでアウトドアスポーツを楽しむことや関西圏からのアクセスの良さなど、他の地域と比較して優位性があり、これらを十分に生かし、アウトドアスポーツ推進に向けた戦略を練っていくことが求められる。
6. アウトドアスポーツを推進するうえで、発信力強化や訪日外国人旅行者の誘客、持続可能な事業モデルの構築などの課題が挙げられる。こうした様々な課題を解決していき、近い将来には「アウトドアスポーツを楽しみたいならば徳島へ!」という見方が共通認識となることを期待したい。

はじめに

「スポーツは、世界共通の人類の文化である」。2011年に成立した「スポーツ基本法」の前文は、この言葉から始まる。同基本法は、スポーツを通じて、国民の心身の健全な発達、明るく豊かな国民生活の形成、活力ある社会の実現及び国際社会の調和ある発展に寄与することを目的としている。同基本法の制定や、2020年のオリンピック・パラリンピックが日本開催に決定したことなどを背景に、2015年10月にスポーツ庁が発足し、国を挙げてスポーツ振興の必要性を示している。

4年に一度のスポーツの祭典である、夏季オリンピック・パラリンピックの開催国に決定し、約2年後というところまで迫ってきていることもあり、国民のスポーツへの関心は高まりを見せている。東京オリンピック・パラリンピックが注目されがちではあるが、2019年にはラグビーワールドカップ、2021年にはワールドマスターズゲームズが日本で開催される。2019年からの3年間は、世界的なスポーツイベントが続けて開催されることから、「ゴールデン・スポーツイヤーズ」と称され、スポーツ業界にとってまたとない好機が訪れようとしている。スポーツ庁初代長官の鈴木大地氏が「これからはスポーツで稼ぐ時代だ」と発言しているように、スポーツ関連市場の経済効果も期待できる。

県内に目を向けてみると、2021年のワールドマスターズゲームズの競技会場は、関西広域にわたる8府県4政令市で開催予定であり、徳島県も含まれている。また、先述の3つの世界大会ほどの規模ではないものの、2017年のラフティング世界大会、2018年のウェイクボード世界大会はともに徳島県開催であり、ゴールデン・スポーツイヤーズに先んじて世界大会が行われている。

今まで述べたように、スポーツは全国的にも盛り上がりを見せ、注目が集まっている。一般的にスポーツと聞くと、サッカーや野球、テニ

スといった競技スポーツを思い浮かべる人が多いだろう。もちろん徳島県でもそれらのスポーツに親しむことは可能であり、実際に行っている人も少なくない。しかし今回は、競技場などの施設や設備があれば全国各地で親しめるようなスポーツではなく、徳島県の豊かな自然環境下で強みを発揮する「アウトドアスポーツ」について取り上げる。

なぜ今、アウトドアスポーツに着目するのか。徳島県にはアウトドアスポーツの世界大会が行われるような世界有数の激流を誇る吉野川や、サーファーから「カイクポイント」として親しまれている海部川河口のサーフスポットなど、世界に誇る自然環境があるということが大前提である。これに加え、このところのスポーツへの関心の高まりや、地域の情報発信の役割などを担う日本版DMO^{*1}の広がりなども挙げられる。日本版DMOに登録されている徳島県関連のDMOは2018年2月末現在で3件あり、2018年度には徳島市を中心とした徳島県東部15市町村^{*2}を対象区域に「徳島東部地域DMO（仮称）」の設立（日本版DMO候補法人に登録）などが予定されている。

訪日外国人旅行者の“爆買い”が落ち着き、モノ消費から「旅行先の美味しい食事を楽しむ」「着物でまち歩きをする」といった体験型のコト消費へシフトしているというような話は、新聞や週刊誌、ニュースなどからよく流れている。観光庁は体験型観光による消費を促していくこ

※1 Destination Management/Marketing Organizationの略、観光地域づくり法人。地域の「稼ぐ力」を引き出すとともに地域への誇りと愛着を醸成する「観光地経営」の視点に立った観光地域づくりの舵取り役として、多様な関係者と協同しながら、明確なコンセプトに基づいた観光地域づくりを実現するための戦略を策定するとともに、戦略を着実に実施するための調整機能を備えた法人

※2 徳島市・鳴門市・小松島市・吉野川市・阿波市・勝浦町・上勝町・佐那河内村・石井町・神山町・松茂町・北島町・藍住町・板野町・上板町

とが必要だとし、課題の対応へ向け「『楽しい国日本』の実現に向けた観光資源活性化に関する検討会議」を設置するなど、取り組みを進めている。この体験型観光には、もちろんアウトドアスポーツ体験も含まれており、徳島県としても積極的に取り組んでいくべきコンテンツであることは明白である。先に述べた徳島版DMOの果たす役割は大きいと考える。

本稿では、「アウトドアスポーツ」に的を絞り、徳島県の現状や取り組みについて整理・考察し、今後の可能性について言及した。

1. アウトドアスポーツとは

(1) 定義

アウトドアスポーツという言葉そのものは聞き慣れていても、具体的にどのスポーツ種目が該当するのかと問われて即答できる人は意外に少ない。広辞苑によれば「屋外で行う競技・運動」、新明解国語辞典ではアウトドア「建物の外」のスポーツと記されており、まったくその通りなのだが漠然としている。スポーツ用語辞典を見ても「屋外で行われる運動競技。陸上競技、ラグビー、サッカー、スキーなど」となっているが、陸上競技やラグビー、サッカーといった競技場などのスタジアムで行われるスポーツでは、アウトドアスポーツというイメージは抱きにくい。厚生労働省のe-ヘルスネットでは、アウトドアスポーツを「野外で活動する運動の総称」としたうえで「一般には自然の中(特に野山)で活動する運動を指すことが多い」としている。また「自然と一体となる爽快感、時々刻々と変化する気象条件を知識・経験と体力で上手に利用していく楽しさを魅力とするスポーツ」であるとしている。具体的なスポーツ種目としては、活動場所によって図表1のような分類ができる。もちろん捉え方によって、例えば水泳はアウトドアスポーツでないと判断される場合もあるため、明確な線引きは難しい。

スポーツ庁は2017年6月に「アウトドアス

図表1 活動場所別のアウトドアスポーツ

場所	スポーツ名
海	ヨット・サーフィン・スキューバダイビング など
水上	カヌー・カヤック・釣り・水泳・ラフティング など
雪上	スキー・スノーボード・ノルディックスキー・スノーモービル など
屋外全般	サイクリング・ランニング・ハイキング・モトクロス など
山	登山・トレッキング・ロッククライミング・フリークライミング など
空中	スカイダイビング・パラグライダー・グライダー など

資料：e-ヘルスネットホームページ「アウトドアスポーツ」をもとに筆者加筆修正

ポーツ宣言」を公表した。アウトドアスポーツを推進する意義として次の3点を挙げている。

①豊かな時間をもたらす

安全への配慮、実施者のレベルに合った内容であれば、年齢や体力にかかわらず、また複雑な技術やルールの習得は不要

②地域を元気にする

アウトドアスポーツの優れた環境は地方部にあるため、交流人口の拡大に寄与し、地域活性化につながることに加え、幅広い産業の活性化にも貢献

③地域と世界がつながる

世界との交流促進につながり、訪日外国人旅行者の拡大にも寄与

このように、地域の魅力を活用したアウトドアスポーツの推進により、地域、ひいては日本全体を元気にすることができるとみている。人を地方に呼び込むことで交流人口の増加につながる。アウトドアスポーツの活用は、地方創生を推進する有力な手段であると言える。また、スポーツの語源はラテン語の「deportare (デポルターレ)」だと言われており、「気晴らしをする、楽しむ、遊ぶ」という意味がある。つまりスポーツの本質は楽しさだということを示している。競技という枠にとらわれず、誰もが体験を通して楽しめる仕組みを作ることこそが、アウトドアスポーツ推進の鍵であろう。

以上のことを踏まえ、本稿ではアウトドアスポーツを「自然環境の中での身体活動を伴う運動(競技かは問わず、体験アクティビティを含

む)。“する”ことを目的とし、人の力を原動力とするもの」と定義し、分析する。

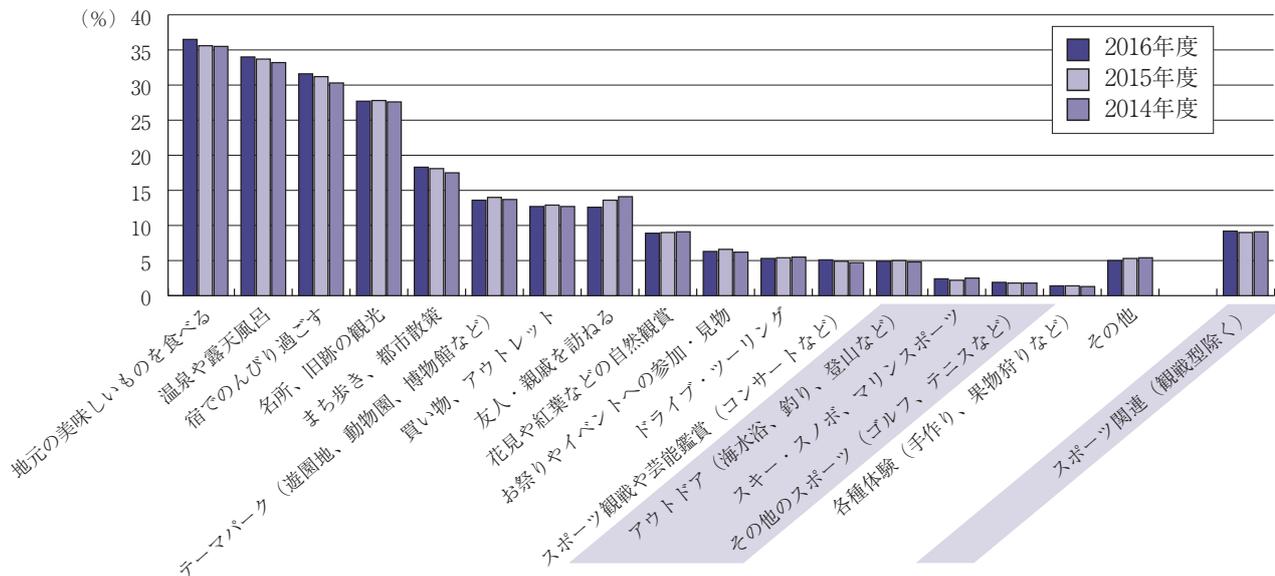
(2) 体験型アウトドアスポーツの需要

まずは国内需要を検討する。日本生産性本部が発表している「レジャー白書 2017」によると、2016年の日本人の余暇活動の現状として「国内観光旅行(避暑、避寒、温泉など)」の参加人口は5,330万人であった。国内観光旅行は6年連続で首位をキープしており、余暇活動としてもっとも重視されていることが分かる。一方でじゃらんリサーチセンターが実施した「じゃらん宿泊旅行調査 2017」(以降、じゃらん調査)^{*3}では、2016年度の1年間に宿泊旅行を行った人の割合は前年度比1.6ポイント減少の54.8%で、同調査を開始した2004年度以降、過去最低となったと報告されている。この2つの調査から、余暇活動として旅行は参加人口がもっとも多いものの、減少傾向にあることが分かる。じゃらん

調査を詳しく見ると、旅行先での支出額^{*4}の推計では、前年度と比べ、買い物・飲食の項目が軒並み減少している。体験・観光についても減少する項目が目立つ中、「スポーツ、アウトドアを楽しむ」「スポーツ観戦、コンサート、祭り」の2項目のみ小幅ながらも前年度比増加しており、旅行中のスポーツ関連消費は今後の伸びしろが感じられる。また、旅行の目的についての設問(複数回答可)では、1位「地元の美味しいものを食べる」、2位「温泉や露天風呂」、3位「宿でのんびり過ごす」となっている(図表2)。「アウトドア」「スキー・スノボ、マリンスポーツ」「その他のスポーツ」といった実際に体を動かす項目(観戦型を除く)個別ではそれぞれ下位であるが、体験型スポーツとして3つまとめて考えると10%程度まで上がる。複数回答可であるため正確な数値ではないにしろ、参考になろう。この比率を高めていくことは今後の課題であり、改善次第で体験型アウトドアスポーツは、旅行の大きな目的として需要が高まっていく可能性を秘めている。前出のレジャー白書に、これを裏付けるようなスポーツ関連種目の潜在需要(希望率から参加率を差し引いた数値)の調査結果がある(図表3)。それによると、男女とも自然と触れ合うアウトドアスポーツが大部分を

- ※3 出張・帰省・修学旅行などを除く、観光宿泊旅行に特化
- ※4 ツアーや宿泊プランにあらかじめ含まれていた内容、現地での交通費、主宿泊地以外の宿泊地や移動中の消費は除く

図表2 宿泊旅行の目的



資料：じゃらんリサーチセンター「じゃらん宿泊旅行調査 2017」をもとに筆者加筆修正

図表 3 スポーツ関連種目の性別潜在需要上位種

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	9位	10位
全体	ヨガ、ピラティス 8.0	水泳(プールでの) 5.1	フィールドアスレチック 4.5	カヌー、ラフティング 4.2	スキンドайビング、スキューバダイビング 4.0	乗馬 3.8	スキー 3.7	スノーボード 3.4	ウォーキング 3.2	パークゴルフ・グラウンドゴルフなどの簡易ゴルフ 3.2
男性計	釣り 5.0	スキー 4.5	カヌー、ラフティング 4.3	スキンドайビング、スキューバダイビング 4.3	パークゴルフ・グラウンドゴルフなどの簡易ゴルフ 4.0	フィールドアスレチック 3.8	スノーボード 3.6	乗馬 3.1	ハングライダー、パラグライダーなど 2.7	水泳(プールでの) 2.6
女性計	ヨガ、ピラティス 13.6	水泳(プールでの) 7.6	フィールドアスレチック 5.4	ウォーキング 5.2	乗馬 4.4	トレーニング 4.2	カヌー、ラフティング 4.1	スキンドайビング、スキューバダイビング 3.8	エアロビクス、ジャズダンス 3.8	ハングライダー、パラグライダーなど 3.2

※ 34 種目を対象に集計している。
資料：日本生産性本部「レジャー白書 2017」

占めており、潜在需要の大きさがうかがえる。

次に、海外需要(訪日外国人旅行者からの需要)について見てみる。先に述べたように、モノ消費からコト消費へシフトしていると言われており、アウトドアスポーツ体験の需要も考えられる。スポーツ・ツーリズム推進連絡会議が示したスポーツツーリズム推進基本方針の中で、ターゲット国ニーズ調査を行っている。この調査は、スポーツツーリズムのターゲット国・地域をオーストラリア、韓国、台湾、中国と想定し、海外旅行経験のある 20～69 歳の男女(スポーツに全く興味のない人を除く)を対象に、各国・地域ごとに 400 件のサンプル回収で分析された。回答者のうち、訪日旅行経験者の割合はオーストラリア 11%、韓国 52%、台湾 70%、中国 61%であり、それらのうち今後の訪日旅行意向者はオーストラリア 65%、韓国 95%、台湾 99%、中国 91%となっており、日本への旅行ニーズの高さが見てとれる。図表 4 は、前述の訪日旅行意向者に尋ねた「再訪日旅行でしたいこと」である。回答サンプル数が同一でないことに留意する必要はあるが、ほぼ全ての項目で中国の比率がもっとも高くなっている。また、中

国以外の 3 カ国についても、例えばスキーなどでは高い比率となっており、アウトドアスポーツの潜在需要は相応に強い。

同調査では海外旅行の情報源も調査しており、全体では「旅行会社のホームページ」がトップで、以下「友人・知人からの口コミ」、「旅行会社の店頭」、「旅行会社のパンフレット」と続く。また、海外旅行で観戦・参加したスポーツの情報源としては、「テレビ番組」、「観戦・参加したスポーツ団体などのホームページ」、「旅行雑誌」、「旅行ガイドブック」、「友人・知人からの口コミ」が上位である。これらの結果を踏まえた情報発信の質や媒体の工夫が求められる。

2. 体験型オプション

(1) 体験までの手順

一般的にアウトドアスポーツを行う場合、方法として以下の経路が考えられる。

①個人レベル

事業者を介さず、またインストラクターなどを付けずに準備から体験まで個人で完結する。

図表 4 今後の再訪日旅行でしたいこと

(%)

	n (サンプル数)	プロスポーツ観戦	ゴルフ	マラソン・ランニングなど	スキー・スノーボードなどウィンタースポーツ	トレッキング・登山・ラフティングなどアウトドアスポーツ	ダイビング・シュノーケリングなどマリンスポーツ	その他スポーツアクティビティ
オーストラリア	258	2.7	3.9	0.8	14.7	8.5	3.9	0.8
韓国	381	2.4	3.9	1.0	12.9	8.4	1.8	0.0
台湾	395	6.6	4.1	3.8	24.1	12.9	10.6	0.3
中国	364	6.6	15.9	17.3	31.9	23.1	19.8	0.5

資料：スポーツ・ツーリズム推進連絡会議「スポーツツーリズム推進基本方針～スポーツで旅を楽しむ国・ニッポン～」

②直接事業者へ体験予約

各社ホームページやパンフレットなどを利用して申し込みをする。

③予約サイト経由で体験予約

旅行会社や宿泊サイト等の媒体を通し、事業者へ申し込みをする(宿泊にオプションとして追加するなど)。

体験するスポーツによっては個人レベルで行えるもの(例えば登山やサイクリングなど)がある反面、事業者を介さなければ困難なものもあるだろう。また個人のスキルによっても事業者を必要とするか自力で可能かが変わってくる。実施者の力量やニーズに合わせて①～③を選択するのがふさわしい。例えば、初めて訪れる旅行先のような場合には、宿泊施設を予約した媒体で同時に申し込む③の方法を用いればスムーズであることが予想できる。

(2)予約サイトの活用

宿・ホテル予約サイト「じゃらんnet」で「遊び・体験予約」の中から、2018年1月25日時点のスポーツ種目ごとの登録事業者数と人気順1位～10位を示した(図表5)。複数の体験(例えばカヌーとスキューバダイビングなど)を取り扱っている事業者があるため、注意が必要ではある

ものの、全国的に体験が盛んな地域として思い浮かぶ沖縄県は、マリンスポーツを中心に強固な人気を誇っていることがわかる。しかし個別に見ると、東北地方や九州地方といった特定の地方に集中しているのではなく、様々な地域が散見される。体験地が多岐にわたることであれば、土地やインフラなどの優位性や発信力の差によって順位が変動すると考えられるため、徳島県としても大いに改善の余地があると思われる。

(3)ふるさと納税の返礼品に体験プラン

2008年度に導入された「ふるさと納税」とは、自分が選んだ自治体に寄附を行った場合に、寄附額のうち2,000円を越える部分について、所得税と住民税から原則として全額(一定の上限あり)が控除される制度である。総務省によると、2016年度の寄附金額は約2,844億円(うち徳島県全体で約6億円、全国46位)であり、自治体の収入源となっている。ふるさと納税には三つの大きな意義があり、そのうちの一つは自治体サイドが国民に対して取り組みをアピールすることが可能な点である。国民に、応援したい地域と思ってもらうことが重要であり、地域のあり方を改めて考えるきっかけとなる。

国民にとって、寄附する動機の一つとなるの

図表5 「じゃらんnet」登録業者数および人気順1～10位の業者がある都道府県(2018年1月25日現在)

(人気順)	スポーツ種目						
	パラグライダー	トレッキング、登山	ラフティング	ウェイクボード、ウェイクサーフィン	サーフィン、ボディボード	スキューバダイビング	サイクリング
1	熊本県	京都府	長野県	福井県	神奈川県	沖縄県	沖縄県
2	鳥取県	沖縄県	北海道	福岡県	宮崎県	沖縄県	沖縄県
3	岐阜県	北海道	岐阜県	沖縄県	神奈川県	沖縄県	山梨県
4	静岡県	北海道	群馬県	東京都	福井県	沖縄県	静岡県
5	静岡県	鹿児島県	北海道	沖縄県	宮崎県	沖縄県	広島県
6	兵庫県	鹿児島県	埼玉県	沖縄県	沖縄県	沖縄県	和歌山県
7	兵庫県	熊本県	高知県	和歌山県	千葉県	沖縄県	三重県
8	宮城県	鹿児島県	熊本県	沖縄県	宮崎県	沖縄県	大分県
9	鹿児島県	群馬県	徳島県	沖縄県	千葉県	静岡県	山梨県
10	愛知県	北海道	群馬県	長崎県	埼玉県	沖縄県	神奈川県
登録業者数 全国	44	92	56	27	54	401	32
徳島県	0	0	5	0	1	1	0
香川県	0	0	0	1	0	0	1
高知県	0	0	3	0	0	8	0
愛媛県	1	0	1	0	0	1	1

資料：じゃらんnetホームページ「遊び・体験予約」をもとに筆者作成

が、返礼品の存在である。自治体は地元をPRするために、寄附者に対し金額ごとに異なった返礼品を用意していることが多い。具体的には、工芸品や農産物、宿泊チケットなどバラエティに富んでいる。その返礼品に、アウトドアスポーツ体験を選択肢として設定している自治体がある。事例としては、鹿児島県徳之島町のダイビング体験やシュノーケリング体験、福井県坂井市のカヌー体験など様々である。また千葉県富里市の「富里スイカロードレース大会」特別参加枠や、群馬県神流町の「神流マウンテンラン&ウォーク」エントリー優先権など、アウトドアスポーツイベントの優先参加を返礼品として挙げている自治体もある。どちらも地域を訪れるきっかけとなり、周辺観光地や宿泊施設、飲食店などに波及効果が見込まれる。徳島県でも、アウトドアスポーツを返礼品に設定している自治体がある。鳴門市のシーカヤック体験ツアーやカヤック&サイクリングツアー、海陽町のサーフィン体験レッスンやSUP(スタンドアップパドルボード)体験などが該当する。

アウトドアスポーツは地域のアピールポイントであり、発信していくべき資源であることの一例である。徳島県でも自治体ごとに積極的にPRしていくことが求められる。一人でも多くの人に徳島県で体験可能なアウトドアスポーツを認識してもらうことが、将来の来県者数増加や体験者数増加、ひいては魅力度向上につながっていくと考える。

(4) 旅行情報誌への掲載

旅行先で何をするか、どこに行くか、何を食べるか、お土産は何を買うか…事前にある程度の情報を得てから旅行に出かけることが多いのではないだろうか。その際に参考となるのが旅行情報雑誌である。東北、関東、中国といった地域区分別、都道府県別、観光地別など、数多くのエリア分けがされており、様々な出版社が手掛けている。ドライブに特化したもの、子ども連れのファミリー向けのもの、日帰り温泉な

ど、旅行テーマによって区分されているものもある。また〇〇年版のように毎年発行される雑誌も多く、直近のトレンドが反映されているのが特徴である。

「るるぶ徳島 鳴門 祖谷溪」(2017年)に掲載されているアウトドアスポーツを見てみると、おすすめスポットとして飲食店や公園などの施設と並んで紹介されている。その中の一部を抽出したのが以下である。エリア・コーナー分けは同誌に即しており、()内の数字は取り上げられていた事業者数を表している。

○徳島便利帳

ラフティング、シャワークライミング(1)

○徳島タウン・吉野川周辺

<脇町周辺> 吉野川中流域でのカヤック(1)

○祖谷溪・大歩危

<吉野川アクティビティ> ラフティング、カヤック、キャニオニング、シャワークライミングなど(4)

<阿波池田周辺> パラグライダー、スキー場(2)

<剣山トレッキング>

○阿南海岸

<阿南海岸周辺> ダイビング、サーフィン、シーカヤック(2)

<吉野川アクティビティ> および<剣山トレッキング> については、1ページ全て用いて紹介されているため、目につきやすくなっている。もっとも、同誌が取り上げているのはごく一部の事業者であり、全数ではないので注意が必要である。しかし全数ではないものの、読者は同誌の情報を頼りに観光すること(または旅行先として選択すること)を考えれば、アウトドアスポーツを推進していくうえで、情報が不足していると言わざるを得ない。アウトドアスポーツ関連情報を充実させることで、徳島=魅力的なアウトドアスポーツの場所としての認識が広まると思われる。

3. 徳島県におけるアウトドアスポーツ

(1) 現状

徳島県でも観光客を誘客する手段の一つとして、また、地域おこしの一環としてアウトドアスポーツを活用する動きが見られる。中でも、県南部や県西部にはアウトドアスポットが豊富であることもあり、様々な取り組みがなされている。

① 県南部

阿南市、那賀町、美波町、牟岐町、海陽町の1市4町は、「四国の右下(みぎあがり)」と称して、地域が「右上がり」になるよう連携して地域振興を図っている。ご当地グルメ「南阿波丼」^{※5}の開発や移住の促進、観光振興など様々なことに取

※5 県南産のお米を使用し、メインとなる食材は県南で水揚げされた魚介類・県南で生まれた肉類・県南で生産された農産物を使用しており、つけあわせ一品にも県南産の食材を使用すること、と定義されている

※6 波が巻いている状態

図表6 アウトドアメニュー体験地



※⑬⑭は複数の事業者が取り扱っており、事業者ごとに活動フィールドが異なるため、記載していない。

資料：徳島県南部総合県民局「南阿波アウトドア道場 4th edition」

り組んでいる。その中の一つの取り組みとして、アウトドアスポーツの活用が挙げられ、主に交流人口の増加策として期待が寄せられている。

同地域の代名詞ともいえるのが、サーフィンではないだろうか。特に海部川河口の通称「カイクポイント」は、チューブ^{※6}が生まれることもある人気スポットとして知られている。また、海岸沿いの立地を活かし、SUPやシーカヤックなど多くのマリンスポーツを楽しむことができる。それらに加え、川や山のスポーツも充実している。海・山・川の距離感も近くコンパクトにまとまっているため、アウトドアスポーツを一挙に体験することが可能であることも魅力の一つである。

徳島県南部総合県民局が発行している冊子「南阿波アウトドア道場 4th edition」では、県南部で取り扱っているアウトドア体験ツアー43メニューや12のスポーツイベントなどが掲載されている(図表6)。ここでのポイントは、フィールドが限定されておらず、海・山・川の全てが記載されていることや、巻末に事業者が一覧で示されていることである。情報が集約されているため一から検索する必要はなく、自分で調べれば漏れが出る可能性があるが、そのような心配も不要である。

また、豊富なツアーの中から自分のレベルに合わせて選択可能であることは初心者にとって安心感につながり、心理的な障壁を下げる役割も果たしていると思われる。同県民局の県南魅力発信担当者によると、同冊子第3版(2010年発行)と最新の第4版(2017年発行)では、アウトドア事業者は増えているという。また、近ごろ人気が高まっているSUPの取り扱いが増えるなど、事業者ごとに流行や体験ニーズに合わせたメニューを考案しており、変化してきている。

こうした一方で、今後の課題として、アウトドア事業者や行政などの

連携によるルール作りと情報発信が挙げられる。アウトドアスポットが地元住民の生活圏と重なることも多く、ローカルルールが設定されていることも少なくない。交流人口が増加すればするほど、観光客と地元住民との間に軋轢が生まれかねないことから、各人にとってストレスのない運用を実現することが不可欠である。そのためにも、まずはアウトドア事業者が横のつながりを持って連携し、受け入れ体制の強化を図ることが望まれる。それに加え、アウトドア事業者と交通・宿泊・飲食など他業種間の連携を深め、交通・宿泊・体験が一体となったバック旅行を作るなど、全体としてまとまって「四国の右下」のプロモートをしていくことも必要となる。

県南部では、地域を盛り上げ、交流人口を増やすために、様々なスポーツイベントが企画、実行されている。「とくしま宍喰オープンウォータースイム」や「ひわさうみがめトライアスロン」、「『四国の右下』ロードライド」、「徳島・海陽 究極の清流 海部川風流マラソン」など種目は多岐にわたる。海部川風流マラソンは、全国で開催されている数多くのマラソン大会の中でも高く評価されており、(株)アールビーズが運営するランナー向けサイト「RUNNET」において、2016年全国ランニング大会100選に選出されているほか、2017年間の種目別フルマラソンでランナーからの評価1位に輝いている。ユニークなイベントとしては「千羽海崖^{せんぱかいがい}トレイルランニングレース」が挙げられる。海岸線を走るトレイルランニングは全国的にも珍しく、約7割は近畿圏を中心とした県外からの参加者である。新聞報道によると、参加者の約半数はリピーターのように、ほかでは体験できない“ならでは”のイベントやコース設定をすることで、付加価値が高まっていると考えられる。地元ボランティアとのふれあいも、魅力が増す要因の一つだろう。このように、今ある資源に付加価値を与えられるかどうかは作り手(企画側)の手腕による部分も大きいことが分かる。

県南部を取り巻くアウトドアスポーツ関連の



徳島県南部総合県民局が発行している冊子類

勢いは増してきている。先に述べたことも一因ではあるが、そのほかの要因としては、2020年の東京オリンピックの追加種目にサーフィンが採用されたことが考えられる。また、2017年5月に行われた国際大会では徳島市出身者が日本人女子初の優勝を果たし、同年10月には世界ジュニア選手権(男子16歳以下の部門)で海陽町在住者が1位、3位になるという快挙を成し遂げた。このところの徳島県勢の活躍には目を見張るものがあり、注目が集まるきっかけとなっている。

②県西部

観光庁は、2008年に制定された観光圏整備法に基づき観光圏^{※7}の形成を支援し、国際競争力の高い魅力的な地域づくりを推進している。「旅行業法の特例」といった各種特例を受けられる「観光圏整備実施計画認定地域」は13地域(2018年2月現在)あり、県西部に位置する美馬市、三好市、つるぎ町、東みよし町が「にし阿波～剣山・吉野川観光圏」として認定されている。この

※7 自然・歴史・文化等において密接な関係のある観光地を一体とした区域で、区域内の関係者が連携し、地域の幅広い観光資源を活用して、観光客が滞在・周遊できる魅力ある観光地域づくりを促進するもの



ラフティング世界選手権 2017の様子

2市2町では、様々なアウトドアスポーツを楽しむことができ、観光資源の一つとして活用が進められている。

にし阿波観光圏の関係自治体や団体で組織される協議会では、自然の魅力を活かした滞在型観光が議論されるなど、アウトドアスポーツを念頭に置いて取り組んでいる。具体例としては、英語を併記したマップやアプリを作成・開発したり、山歩きガイドの育成をしたりと、ハード・ソフト両面のインフラ整備が挙げられる。徳島県西部総合県民局にし阿波観光戦略担当者によれば、にし阿波のアウトドアスポーツ環境は“激しさと穏やかさ”の両方を併せ持っていると言う。吉野川の激流ではラフティング、山あいでの風の影響を受けにくい池田ダム湖ではウェイクボードと、近距離で様々なスポーツができる。上述の水辺のスポーツに加え、パラグライダーなどの空のスポーツ、トレッキングなどの山のスポーツなど様々なフィールドで体験でき、さらに冬季は雪に覆われる山もあることから、スキーなども可能で、年間を通してアウトドアスポーツに親しめる地域と位置づける。また、地域活性化に向けて推進力となっている大歩危・祖谷いってみる会や地域連携 DMO の(一社)そらの郷の存在が大きい。ただし、アウトドアスポーツの潜在的可能性を考えれば現状道半ばであり、今後重点的に推進していきたいと考えている、とのことである。今後の適切な取り組みによって、さらなる需要増加が期待される。

2017年10月2～9日の大会日程で、吉野川

中流域を会場とした「ラフティング世界選手権 2017」が三好市で開催された。同大会には22カ国(71チーム 515人)が参加し、競技が行われた6～9日の4日間で17,500人が観戦のため現地に訪れたという。大会結果は、徳島県勢が総合優勝を果たすなど大いに健闘した。全国トップクラスの激流を誇る吉野川は、水量も多く、それでいて水質が良い。世界大会の誘致成功は、多くの関係者の努力はもちろんのこと、吉野川自体が世界水準の環境を有していることが決定的な要因であったと考えられる。このことは、国内外に向けての大きなアピールポイントとなる。三好市は、豊かな水資源を地域活性化に活かそうと「ウォータースポーツのまち」として発信している。

世界大会の会場として選ばれた競技は、ラフティングだけではない。ウェイクボードでは2016年9月に第1回アジア大会が開催されたほか、来る2018年8月30日～9月2日には、同じ池田ダム湖を会場として「30回記念大会 WWA ウェイクボード世界選手権大会 2018」が予定されている。また大会規模は違うものの、東みよし町では2010年に「第2回パラグライディングアジア選手権」開催の実績があり、2016年には「2016パラグライディング日本選手権 in 吉野川」も開催された。

このように、にし阿波には優れた自然環境がある。中でも比較的認知度が高いと思われるウォータースポーツをきっかけに、空や山のスポーツへと誘導し、多種目のアウトドアスポー

ツ体験メニューを提供することで、観光客の長期滞在をねらい、関連産業の活性化に導くような工夫が望まれる。

③徳島県全域

これまで、県南部や県西部では地域の特色を活かした様々なアウトドアスポーツができることを紹介したが、徳島市でも街の中心部としては全国的にも珍しいSUP体験などを取り扱う事業者があり、新町川でその風景を目にすることもある。また勝浦町では、開催期間を設け「里山ポタリング」という名称で、10km、20km、25kmの3コースでの自転車散策を提供している。市町村ごとに見ていくと、ほかにも個別の取り組みはたくさんあるが、県内全域を通してでは、特にサイクリングに関する施策が進められている。

徳島県は「自転車王国とくしま」のブランドを発信しようと、サイクルスポーツ関連の支援、推進をしている。これは県民の運動実施率の向上や健康増進などを目的としている。自転車に着目した理由は、

- 自然環境を活かせること
- 県民は通勤、通学で自転車に触れる機会が多いこと
- ランニングに比べ、ひざや腰など体への負担

が小さいこと

などであり、「自転車でつながる人・まち」づくりプロジェクトの一環として、ライドイベント開催の支援や、集団で走行する際のルールやマナーを学べる初心者向けのミニガイドツーリングを毎月開催するなど、県民に対する施策を行っている。また公式コースとして25コース(県央5、県南6、県西5、県北4、自転車王国とくしま+5)を設定している。

「自転車王国とくしま」として、今後は四国4県が一体的に取り組む「四国一周サイクリング」等の推進により、県内外への発信力を強めることで、観光客の増加や地域の活性化といった効果が期待される。

(2) 比較優位性

徳島県にはアウトドアスポーツを推進するうえで、他の地域にはない比較優位性があると考ええる。これまで述べたことと重複するが、第一に、世界大会を行えるほどの環境があることだ。世界クラスの激流や国際レベルで活躍するサーファーを育てるサーフポイントなど、国内のみならず海外にも誇れる自然がある。第二に、海・山・川・空のフィールド全てでアウトドアスポーツを楽しめる環境があり、しかもそれぞれのスポットが近距離でコンパクトにまと

まっている点だ。わざわざ越県する必要はなく、仮にアウトドアスポーツツアーを組むにしても、県内だけで完結し得るほどバラエティに富んでいる。また、地域の歴史や文化面を取り入れて提供することで、魅力が一層高まる。唯一無二の地域として認識されることにつながり、“徳島ファン”が増加する、といった好循環を生むことが期待される。第三に、国内観光客をターゲットにした場合、アクセスが良



コースを記したパンフレット

いことが挙げられる。県南部にある事業者に聞いたところ、県外から体験に訪れる人は全体の6～7割に上り、そのほとんどが大阪や神戸といった関西圏からの来訪だという。ほかの事業者ではその割合はさらに上がり、8割ほど県外客で、大阪、神戸といった関西圏のほか、広島や岡山からの体験者も多いようだ。事業者によって差は見られるものの、総じて関西圏からの需要が大きく、一方で、関東からの誘客には課題があり、まずは認知度を上げる必要がある。

これらの優位性を十分に生かし、アウトドアスポーツ推進に向けた戦略を練っていくことが求められる。

(3) 波及効果

今後、県全体でアウトドアスポーツが盛り上がっていくと、影響を受ける周辺産業が多い。例えば、スポーツ用品店や飲食店、宿泊を伴えばホテル・旅館など、裾野が広い。地域全体を活性化するのに適したコンテンツだといえる。

実際にすでに波及効果が及んでいるものとして、徳島県への移住が挙げられる。世界水準の自然環境があることは、競技者にとって移住の決め手となる。ラフティング世界選手権で総合優勝を果たした女子チームのメンバーの中には、吉野川に惹かれて県西部に移住した選手もいるようだ。ウェイクボードアジア協会の会長も池田ダム湖に魅せられ移住しており、現在は三好市の地域おこし協力隊としても活動している。県南部に目を向けると、美波町のサテライトオフィスや「きゅうりタウン構想」の一連の取り組みには、働く場だけではない地域とのつながりがあり、そこでしかできない生き方の選択肢を与えてくれる。サテライトオフィスの進出が目覚ましい美波町では、サイファー・テック(株)代表の吉田氏が提案する「半X半IT」というライフスタイルが実現している。これは“ITで仕事しながらXをする”ことで心豊かな生活を送る一つの手段である。ここでの「X」は十人十色であるが、県南部での一例としてサーフィンやス

キューバダイビングといったアウトドアスポーツが当てはまる。これらは、全ての地域で成立することはない徳島県の付加価値であり、恵まれた環境であると言える反面、この環境を生かすも殺すも取り組み次第であるため、効果的な情報発信が重要になってくる。

アウトドアスポーツの推進によって、周辺産業の活性化や、交流人口の増加、さらには移住促進による定住人口増加など、波及効果が広く及ぶことが見込まれる。

(4) 推進に向けての課題

アウトドアスポーツの推進で県内にもたらされる好影響は大きいとはいえ、課題は山積している。特に重要であると思われる3点を示したい。

まず、発信力である。県南部や県西部ではある程度まとまった情報発信が出来ているものの、県全域で見ると、観光客目線で分かり易いとは言いがたい。県内のアウトドアスポーツ体験施設、事業者を一覧にし、マップに落とし込むなどの工夫が必要であり、旅行情報雑誌を発行している出版社などに働きかけ、より詳細な情報を提供する必要がある。それと並行して、利便性向上のため、予約サイトをワンストップ化することも不可欠である。

次に、訪日外国人旅行者の誘客である。とりわけ富裕層を呼び込む方法を模索することが重要である。自然環境が優れていることだけでなく、提供するメニューにアウトドアスポーツ以外のコンテンツで、例えば歴史・文化的な要素を織り込むなどの工夫をし、驚きや感動といった付加価値をつけることが望まれる。外国人旅行者が真に求めているものを正しく理解し、具体的な形にしていかなければならない。国内需要を増やし、その盛り上がり起爆剤として、訪日外国人旅行者を誘客し得る外国人向けの商品開発が急がれる。

最後に、持続可能な事業モデルの構築である。アウトドアスポーツは自然からの恵みを資源に

変え、その恩恵を受けている。観光開発や地域活性化ばかりに気を取られ、環境の保全という視点を忘れることがないようにしなければならない。自然環境にダメージを与えない、持続可能なモデルの構築は必要不可欠となる。また地域住民の理解を得ることも重要であろう。しかしその一方で、事業者のニーズに従い、規制緩和すべき点もあるかもしれない。環境保全や景観の保護と規制緩和をバランスよく行っていくことが求められる。

こうした様々な課題に対し、一つひとつ丁寧に対応する地道な取り組みを続けることが、解決への一番の近道となるだろう。

おわりに

自然環境に恵まれた徳島県はアウトドアスポーツの適地であり、潜在的な可能性は莫大である。これを国内外から観光客を呼び込むためのコンテンツの一つとして活用を推進していくことが求められる。中でも富裕層や連泊する観光客を

増やすことで、地域への経済効果は一層大きなものとなるだろう。アウトドアスポーツの推進は、人口が減少していく中、交流人口の増加につながるものであり、その重要性は一段と高まっている。

ラグビーワールドカップやオリンピック・パラリンピックの国内開催を控えている現在、スポーツ全般に対する関心は高まっている。また消費傾向がモノからコトに変化していることも、アウトドアスポーツの需要増加を後押しすると推測される。この機会を逃さないよう、県全域で連携した動きが求められる。

環境保全や情報発信、インフラ整備、ルール作りなど、取り組むべき課題は山積しているが、粘り強く一つひとつ解決していけば、必ず大きな成果が得られるだろう。「アウトドアスポーツを楽しみたいならば徳島へ!」という見方が共通認識となるような将来を期待したい。

最後に、本稿をまとめるにあたり、取材へのご協力や多くのアドバイスをいただいた関係者の方々に、改めて心から感謝申し上げます。

〈参考資料〉

- ・小倉伸一編著「改訂版 スポーツ用語辞典」三修社 2011.7
- ・金井美由紀編「徳島 鳴門 祖谷溪」、『るるぶ情報版』JTB パブリッシング 2017.8
- ・笹川スポーツ財団「スポーツ白書 2017 ―スポーツによるソーシャルイノベーション―」2017.3
- ・新村出編「広辞苑」（第7版）岩波書店 2018.1
- ・スポーツ・ツーリズム推進連絡会議「スポーツツーリズム推進基本方針 ～スポーツで旅を楽しむ国・ニッポン～」2011.6
- ・日本生産性本部「レジャー白書 2017 ―余暇の現状と産業・市場の動向―」2017.8
- ・原田宗彦・木村和彦編著「スポーツ・ヘルスツーリズム」大修館書店 2009.12
- ・文部科学省「スポーツ基本法 スポーツの力で日本を元気に!」
- ・山田忠雄・ほか編「新明解国語辞典」（第7版）三省堂 2016.1